

天門会再考

— 現代中国民間結社の一考察 —

三 谷 孝

はじめに

民衆運動や民間の秘密結社について後世に資料が残るのは、ほとんどの場合、それが暴動や官憲による摘発などを契機として、秘密裡におこなわれてきた活動が露呈したことで、人々の注目を集めた時であろう。二〇世紀の中国の農村民間結社についても、たとえば国民革命の進展に影響を与えて注目された場合や県政府や軍隊との衝突といった事件を起こした時に書かれた記事などによって、断片的な事情を知ることができるが、ある一つの結社がいつ結成されて、どのような活動を展開し、またいつ終焉を迎えたのが判っている事例はほとんどない。そんな中で、一九二〇年代以降に河南・河北・山西三省の境界地帯で活動した天門会という結社については、その創立から壊滅、そして再生から解体までの経緯を文献資料によって追跡することができる。それは、この結社が非常に急速に発展して郷村

社会に波乱を巻き起こしたことから当時も注目されたこと、また共産党の統一戦線工作が一定の成果を収めた実例として現在も資料発掘の努力がなされていることによっている。

この結社の歴史は、韓欲明という貧農が創立した林県を本拠とする天門会集団が活動した一九二三年から一九三三年までの時期と、浚県の豪農・楊貫一が指導権を握って郷村防衛にあたった一九三八年から一九四五年までの時期に分かれている。後述するように、この両者は、韓と楊との間の直接的師承関係を通して伝授された信仰と天門会という名称は共通しているものの、組織構成や行動形態は相違している。むしろ、前者の活動によって蒔かれた種子が、異なった土壌と環境に適應しながら変容して後者の組織というかたちで成長したものと考えた方が分かりやすいかもしれない。以下、前者を林県天門会、後者を浚県天門会と呼ぶことにする。

林県天門会については一九七四年に発表した論文の中で論及し、その活動の展開過程についても一通り検討したことがある。⁽²⁾ その当時、国民革命期における農民暴動の年表を作成するために、『時報』・『申報』・『順天時報』などの新聞の関連記事を拾い読みしていく中で、この結社の存在に気づいたのであるが、天門会に関する研究などは皆無であったために、それらの新聞記事や『重修林縣志』(一九三二年)・『磁県県志』(一九四一年)・『安陽県志』(一九三三年)・『成安県志』(一九三二年)などの民国時期に編纂された地方志の断片的な記事を収集して、その組織と活動の一応の輪郭を把握しようとしてとめた。当然この二つの論文には、不明のままに今後の課題として残さざるをえなかった多くの問題点が存在した。しかし、一九八〇年代になると、「改革開放」政策の歴史学界への波及の結果、中国でも地元研究者を中心に研究論文や回想録が発表されるようになり、また、外国人でも現地を參觀して関係者から聴き取り調査をおこなうことも可能になった。そして、一九八八年五月には、林県天門会の発祥の地・東油村を訪問して村の様子を観察するとともに、天門会に参加した三人の老人から往時の話を聴く機会をえた。⁽³⁾ さらに一九九三年

一〇月には、南開大学歴史系と中共河南省委党校の援助をえて、再び東油村と浚県三角村を訪問して老天門会員にインタビューし、さらに楊貫一の子女からも話を聴くことができた。

本稿は、そのように前稿発表以後に中国で刊行された研究・文献資料と一九九三年秋に実施した河南省林県と浚県での現地調査の資料（その応答録は日本語訳して末尾に付載した）⁽⁴⁾にもとづいて、課題として残されていた点を中心に天門会という結社とその活動のあり方を現在の時点で再考察しようと試みたものである。

1 林県天門会の創立と活動

(1) 天門会創立の事情

林県天門会の創立から壊滅までのもつとも要を得た文献は、『重修林縣志』（一九三二年）に収録されている「天門会始末記」という記事であろう。この文の著者・李見荃（一八五六—一九三四）は、林県城に居住していたこの地方の名士で、清末甲午の年の進士として湖南靖州・直隸州知州などを歴任し、県志の編集責任者になっていた。また、「文人を嫌悪した」とされる韓欲明からも敬意を払われていた人物だとされている。このように李見荃は、林県有数の知識人として土地の風俗・人情に精通するとともに、韓欲明とも面識があり、天門会の活動の一部始終を近接した位置から強い関心をもって注視していた人物である。何よりも「愚民の暴挙」として歴史から抹消されかねない天門会の活動の経緯を記した文章を『重修林縣志』にとくに付載したことに、この人物の天門会への関心が通りいっぺんのものではないことがうかがえる。その意味で、この「天門会始末記」は、一〇ページ程の短文であるにもかかわらず、林県天門会に関するもつとも基本的な記録といえることができる。その冒頭には、天門会の創立の事情が、以下の

ように記されている。

「天門会は民国一五年に起こった。その頭の韓根は石匠をしていた。当時、匪賊が至るところに出没しており、官憲は取り締まることができなかった。韓根は、匪賊を防ぐという名目のもとに、神より伝えられた符法で銃砲を避けることができる」と称した。約四十人がこれに結集して神壇を開いて、ことごとく神に命を請うた。この四十人は皆『欲』の字を用いて改名した。韓根も韓欲明と改称して団師となった。当初、その名は知られていなかった。(民国)一五年三月、合澗鎮の民団隊長の李培英が油村に天門会というものがあると聞いて偵察にやってきた。欲明はこれを捕虜にするとともに、団員一八人を殺してその銃を奪った。官憲はこれを追究しなかった。このことで、天門会の名は知られることとなった。五月初旬に土匪の郝千金を撃破し、人質とされていた数人を救出したことで、いよいよ有名になった。入会者は日増しに多くなり、十人百人の群れをなして、肩には紅纓槍や連発銃をかつき、黄色いお符の紙を持って、続々と油村にやってきた。油村には、文帝上神を祭った廟が造られた。その規模は宏大なもので金鑿殿と誤り伝えられた。村はもともと荒れた寒村であったが、ここに至って酒飯館もあるような小市場となった」(括弧内は引用者による補足説明、以下同じ)。

ここで李見奎は、土匪の襲撃からの村の防衛・民団との衝突・文帝上神信仰にもとづく会員の結束について述べているが、不思議なことに、天門会創立に関する他の多くの史料にみられる夢での神告と石印の発見に論及していない。たとえば、北京で刊行されていた『晨报』には次のような記事がある。

「河南林県天門会首領韓玉明(韓欲明)は、黄巾の故技に倣って、田間を漫遊しながら、以前に一つの印鑑を得た、それには『靈寶大法司』の五字が刻印されていたなどと宣伝した。また、夜間に神が夢に託して、天に代わって道を行く、世を救い人を安らかにするよう彼に命じたなどと言った」(『晨报副刊』第七七号、一九二七年三月一九日)。

また、共産党機関誌・『嚮導』も二回にわたってこの伝聞を報じている。

「林県牛村（油村）に一人の石匠がいた。村外の石塊の中に印鑑があるから取りに行くようにとの夢の中の神のお告げに従って、夜明けに出掛けて石を砕いてみると確かに印鑑が出て来た。これをきっかけにして天門会を創唱し、香を焚き呪文を念えれば銃砲を避けることができる」と称した。槍を持って戦いに出掛けては勇敢に敵を殺したので、農民は次第にこれを信仰するようになった⁽⁵⁾。

「林県の東油村に一人の石工がおり、石の中から石印を発見して、その夜に神仙より銃砲を避ける術を授かったということだ。彼は一般青年農民数十人にこれを伝授して、匪賊の一掃に乗り出した。連戦連勝であったために、農民は続々と加入し、数カ月以内に同県の土匪は完全に肅清されてしまった⁽⁶⁾」。

これらの記事が発表された当時、すでに共産党員が韓欲明と接触していることから見て、『嚮導』は独自の取材によってこのように伝えたのであろう。韓に天命が下ったことを示す神告と石印の発見の噂が相当広範に広まっていたことを推測させる。

もう一つ、河北省『威安県志』（一九三一年）に付載された「会民之起」には、民国一七年夏に林県の李北海先生から聞いた談話にもとづいた次のような記事が見られる。

「河南林県油村溝の人で韓玉明（韓欲明）なる者がいたが、もともと農作業には熱心でなく、常に粗雑な大工仕事で生計を助けていた。民国九年秋の収穫が期待できなくなり、また大工仕事で糊口をしのぐことも不可能となったので、山西に売菓の行商にをかけて生活費を稼ごうと考えた。しかし、そのための旅費もないので家に古くからある銅鉄の類を探したところ、祖先の遺した一つの銅印を見つけた。その上には靈寶法司之印の六字が彫られていたが、すでに腐蝕していた。韓は、自分は医術を知らないし、商売用の薬もごく普通のものなので、誰も買ってくれな

いのではないかと心配し、この靈寶の二字は神が賜った神印であって、これで札に印刷して売れば、効驗あらたかな神薬として売れ行きがよくなり利益があがるものと考えた。そして、葉を背負い印を携えて山西沁県一帯に赴いた。売れ行きはともよく、実家と従兄弟の老石匠宛に商売がすこぶるうまくいっている旨の自慢の手紙を寄こした。その後この葉では病気が治らないので、ついに疲労困憊して民国一二年に故郷に舞い戻ってきた。……民国一五年九月末油村溝の土地廟の修理のために老石匠も村に来て石工をしていた。夜は韓の家に泊まったので、韓と相談して次のように言った。現在土匪は盛んに活動し、人民の生命財産は委託するところもないのに、官署の苛捐雑税は日増しに重くなり、人民は生きている心地もしない。聞くところでは河南靈寶県に紅槍会があって土匪を打ち、県署の税金に抵抗することができるといふ。この神印にも靈寶の二字があるのだから、ここでも会を創立して会費を集めて蓄財すれば以前の売葉よりはるかに勝るだろう、と。韓は人が信じないことを心配した。すると、老石匠はまたつぎのような謀り事を描いた。そして、夜間に銅印を山麓の石の割れ目に深く埋めておいた上で、翌朝に村の少年をそこにつれて行って掘ってみたところ、偶然にも銅印を見つけたので、人々は驚いた。そこで急いでそれを拾い上げて『なんと不思議なことだ。夜に玉皇老爺が私に銅印を賜って、天門大会を創立して人々を救うように命じられたが、その通りになった』と言った。老石匠もこれに従って側近となり、一、二人の党が成立した。

この天門会の創立についてももっとも詳しくかつ臨場感あふれる記事では、神告と「銅印」の発見という「奇跡」が韓欲明と老石匠の共同謀議によるもので、証拠の「銅印」は韓の家にあったものとされている。この見てきたような叙述が事実を伝えたものかどうか、七〇年代までは真相は闇の中にあった。石印はどこから出て来たのか、この「奇跡」はホンモノか演出か、これを明らかにしたのは路永貞の証言である。

一九九〇年八月に路永貞は、喬培華氏のインタビューに答えて、石印は自分の父親の路五令が一九〇〇年ころに墓

地で掘り出したものであること、路家で保存していたが山西に出稼ぎに行った時にこの印を押し紙を患部にあてると病気がよく治るので家宝として大切にしたこと、天門会の「保管」（文書係）となった兄の路貞が韓欲明にこの「天陽石印」発見劇の演出を提案し韓の賛同を得て実行に移したことを証言している。⁽⁸⁾

陳勝・呉広の例以来、既成の社会秩序からの離脱・背反を意味する反乱を企てる指導者は、民衆の日常意識に衝撃を与えて潜勢力を引き出すとともにその行動を方向づけるために、さまざま「奇跡」を演じることを繰り返してきた。「会民之起」の記述は、この紋切り型の演出を伝聞をもとにたくみに絵解きをした知識人がいたことを示している。しかも、印鑑に彫られていた文字まで明らかにしているように、李北海の得ていた情報はかなり正確なものであった。路永貞の証言との間には、路五令・路貞と韓欲明との関係などの点で相違はあるものの、後半部分の情況、すなわちこの石印が病気の治療に効験があったことや自分に天命が下ったことを証明する石印を韓が発見したという本筋では一致している。李見荃は天門会の創立に関するこのような噂は十分承知の上で、信賴するに足りない情報として、「天門会始末記」に記すのを斥けたのであろう。このような李の姿勢は一貫していて、二六年以前の秘密活動時期の天門会についてもまったく言及していない。対照的におそらくは実情を知っていた共産党の機関誌がもっともらしく報じているのは、この出来事を「科学的」に解釈してみせることが「同盟軍」との関係にマイナスに作用するのを避けるという政治的判断によるのだろうか。

ところで、もう一つ明らかにしたことは、天門会の創立者は韓欲明一人ではなかったということである。このことを最初に指摘したのは、管見の限りでは、梁心明⁽⁹⁾である。梁の証言によれば、天門会の創立を発起したのは郭官林と韓根子の二人であった。かれらは文帝上神（文昌帝君）を信奉し、入会者にはその神位の前で香を焚き表を燃やして叩頭して、悪事をせず、悪人にならず、会内の秘密を漏らさないことを神に誓わせた。また、「靈寶大法師印」を

韓根子に天命が下ったことを示す証拠として宣揚したという。活動を開始したばかりのころの天門会は、「大衆の病気を治療し、人に善を勧め、秘密に集団をつくり、ひそかに会員を發展させる方式」をとっていたという。しかし、会の勢力が大きくなり、韓根子を中心とする武闘路線が台頭したことで、官憲との衝突から造反へと事態がエスカレートすることを恐れた郭が身を引いたため、その後は韓の独壇場になったとされる。郭官林は、当時三十余歳、十余畝の土地をもつ農民で、数年間私塾に通ったことからいくらか文字を知っており、鬼神を信仰し、秘密宗教結社の東聖道に参加していたという。韓根子も郭の紹介で東聖道に加入していた。⁽¹⁰⁾鈴木中正氏によれば、白蓮教系結社の組織内部は宗教派と武力派の二本立てになっているとされるが、その分類に即して言えば、文団師の郭官林は宗教派、武団師の韓根子は武力派ということになる。そして、天門会発足時に主導権を握っていたのは郭官林の方だったのである。郭の辞職後、韓は文団師を継ぎ、武団師には路来法がなったという。⁽¹¹⁾まもなく韓は文団師を総団師と改称して、名実ともに最高実力者になった。このような両者の関係から推測すれば、神印の発見劇は、「巫師の流に近い」郭官林の脚本と路員の提供した印鑑にもとづいて韓根子とその腹心の若者達が演じたものと見るのが一番無理のないところであろう。

こうして、一僻村に起こった「奇跡」は人から人へ口伝えに誇張され変調されて伝播して、波乱を期待する人心に一石を投じることとなった。韓欲明¹¹偽皇帝説もその過程で派生したうわさの一つといえる。天門会が起義の旗を立てて公然活動を開始したのは、一九二六年四月のことであるが、河南省の山岳辺地で起こったこの運動は、半年も経たない内に上海の新聞・『申報』に次のように報じられた。

「予北（河南省北部）林県では、教匪天門会会主韓某が、数千人を結集して、槍を備え武器を購入し、天門大皇帝を自称して、従う者たちに邪術のお符を授けていた。かれらは同県の油村地方に盤據して、捐税を徴収するとともに

県の武器を奪い取って、正税を差し押さえた。油村政府と言われるほどの勢いであった。この韓匪賊の行動はまったく噴飯もので、民衆を集めて訓練する時には、色々な神話で宣誓し、自らは龍袍（皇帝の衣服）を着て頭には皇冠をかぶり、玉璽詔書を印刷し、靈宝元年という年号をつくった。また、文武の職官を設置して命令を下した。その情形は、一昨年に同地で朱明（朱元璋）十九世の子孫を自称した朱九と王六仔の二人の偽皇帝の様子とよく似ている」（『申報』一九二六年八月二六日）。

農村民衆の「愚昧」な行動への侮蔑感を隠さないこの記事は、草莽から繰り返し出現する皇帝自称の反乱者の一事例として韓欲明をとらえている。しかし、韓が天門会の総団師として独裁的権力をふるったことは多くの証言によって確認できるが、こうした新聞記事以外に皇帝を自称したことを裏付ける資料はない。⁽¹³⁾ 情報の伝播の過程で噂が噂を呼んで、多くの前例があつて受容しやすく劇的かつ明快な内容の消息へと変容していったことを示しているのかもしれない。この「天門大皇帝」説は、夢の神告・石印の発見と組合わさつて、「真命天子」の出現を期待する民衆を媒介として各地に伝えられていったのだらう。⁽¹⁴⁾ かくして天門会創立とその活躍の噂は非常な速度で近隣の地方に伝えられ、「無知の愚民は蟻の行列のように先を争つて入会し、その蔓延の速度は驚くほど早かつた」（『磁縣縣志』）と言われるように、人々は東油村に押しかけた。

入会希望者は、金鑾殿とも呼ばれた東油村の文帝上神廟で修行した。そして、一定期間の課程を修了した後、総団師から支部長ともいうべき伝師に任命されて出身地にもどつて、その地域に天門会の分壇（支部）を設置して組織を拡大した。地方の支部組織も、文武の二本立てになっており、文伝師と武伝師という責任者がいた。つまり、総団師である韓欲明の下に、総壇を掌る文団師（韓の兼務として総団師に改称）・武団師が直属し、さらに支部組織である分壇では総団師に直接任命された文伝師・武伝師がそれぞれの分担に応じて会徒を指導していた。分壇はおよそ二〇

華里離れるごとにおかれ、文・武伝師はおよそ二百人いたという。急速な天門会の発展・拡大が可能となったのはこのような組織運用によるものと思われる。同時期に自然発生的に拡大した紅槍会型組織とは違って天門会が「中央集権的」であるとされたのは、このように総団師が各地の文武伝師を直接任命していたというこの一点にあった。しかし、創立時に四〇人程度だった会員が、短期間に二三県に及ぶ地域の三〇万人に急膨張した背景には、軍閥戦争下の農村社会の実情を反映した複雑な事情が存在していた。

(2) 天門会の地域的拡大と組織の複雑化

天門会は、各地へどのように拡大したのか、いくつかの地域の具体的な状況を見てみよう。⁽¹⁵⁾

① 河北省磁県

一九二六年末、磁県潘旺村の農民・李有録は、林県へ赴いて天門会の伝師の認可を得て帰り、分壇を設けて人々にお符を呑み呪文を念える術を授け、土匪からの家郷の防衛と捐税の不払いを呼びかけた。駐屯軍による糧秣の強奪に不満を抱いていた農民がこれを支持したため、まもなく西南郷百余村三万余人の人が天門会徒となった。これとは別に彭城鎮の磁器職人・范清和が、林県で認可を得て設壇し伝導して会員を結集した天門会組織があった。この集団は、彭城鎮の税局を襲撃し、民団局の銃を奪った。

② 河北省臨漳県

一九二七年春、馬軍宮村の農民・范義と冀更新は、林県に来て天門会を学びそれぞれ文・武伝師に任命されて、馬軍宮に壇を設けて、会衆を集めた。彼らは付近の土匪を一掃し、『天門会があれば、税金を出さなくともよい』と宣

伝したため、入会者は急増した。

③ 河北省渉県

一九二五年、渉県合漳村の貧農・馮貴徳は、「失意の秀才」・馮保漢とともに付近の台上・溫和・後溝などの村の農民八〇余人を連合して、林県に来て天門会総団師処に壇を設けることを請うた。韓欲明は馮貴徳を武伝師に、馮保漢を文伝師に任命して、渉県に壇を設けることを許可した。彼らは、「農民が耕している土地は小作料・捐税を納めない」(「農民種地不交租納捐」)のスローガンを提出して、広範な農民の支持を得たため、渉県で天門会は急速に発展した。馮貴徳が直接指揮する武装会隊は一〇個大隊・一五〇〇余人、最大時には三〇〇〇余人に達した。

④ 山西省東南部

「平順県は林県と境を接しており、移り住んでいる林県人が多かったが、土地の人(土人)の圧迫を憂えていた。ここに天門会が伝えられ、官憲が禁じたがやまなかった」(「天門会始末記」)とあるように、林県に近接する山西省平順県・壺関県の林県籍の農民の要求にこたえて、韓欲明は伝師の張徳元を派遣して壇を設置させた。この天門会は閻錫山軍の弾圧を受けたが、林県の天門会本部の支援を得て抵抗し、『殺富濟貧』『抗粮抗款』『救災救難』を唱えるとともに、『天門会に参加すれば粮錢(税金)を払わなくともよい』というスローガンを掲げて農民の強い支持をえたという。

⑤ 河南省輝県

「崔家には歩兵銃四十余挺があつて、西川(輝県侯長川)の地主紳士実力派であつた。この土地の大半は崔家が占めており、多くの農民はみな崔家の佃戸であつた。……天門会の勢力はすぐに西川に進入してくる可能性があつた。(隣接する)東川の地主大戸が避難したことは、わが封建大家族を驚かせた。避難すべきか、あるいは天門会に参加

するのがよいのか、議論は紛糾し、みなうろたえて結論は出なかった。……わたしの祖父（崔振崗）は、崔家の族長で一切を取り仕切っていた。伯父の崔弼元は祖父と相談の上、天門会に投じて家族の勢力を保持すべきだと提案し、祖父の同意を得て、信頼できる使用人の高元を林県油村に派遣して天門会と連絡し、彼らが輝県西川に壇を設置して教えを伝えてほしいと要請した。かくして一九二七年秋、天門会の会隊団（連隊に相当）が西川に進出して、壇を設けて、崔振崗を輝県天門会総会長に任命した。

⑥ 河南省浚県

一九二六年冬、浚県三角村地主楊茂林の命を受けて、息子の楊貫一は村の青年二十余人を連れて天門会を学びに林県に赴いた。一九二七年、伝師となって村に帰った楊らは、文帝上神は靈験あらたかで、天門会は槍・刀・炮を避けられると唱えた。

このように、天門会を組織する動機は、地域によって多種多様なものがあつた。①と②は官府の税金への抵抗、③は抗税と小作料不払い、④は客民への抑圧に対する反撃としての武装組織の設立と抗税、⑤と⑥は村落自衛と地主支配の維持というように概括できよう。天門会導入の主体になつた人物の村落社会で占める位置とその地域の状況の必要に応じて生じた偏差をもちながら、同会は民間の武装宗教組織として伝播していった。天門会加入の利点は、宗教活動と武術訓練を通して郷民を組織できること、税捐あるいは小作料を納めないですむこと、軍隊や他の会門との衝突が生じた場合に天門会本部の強力な支援を期待できることであつた。また、⑤の崔姓の場合のように隣接する地域の天門会が強大化していく様子を見て、それに加入しないでいることの危険性の自覚から参加したものもあつた。こうしてみると、林県为天門会総団の各支部に対する統制力は、本部の動員しうる軍事力の多寡に比例する関係にあつたと見ることができよう。会勢の上昇期に急速な地域的拡大が可能となつたのも、また分解がそれ以上に急激であつた

のもこの関係に起因したものと見えるだろう。

天門会の地域的拡大は、構成員の複雑多様化をとまなげて進行した。上記の場合を見ただけでも、佃戸・貧農層を中心とした組織、林県出身の移住民の組織、地主層主導下の組織などが見られる。同時に、天門会の勢力の増大を見てこれまで他の会に入っていたものが改めて天門会に入会する、あるいは他の会がそのまま天門会に鞍替えするといった事態も広範に発生したことが指摘されている。当時、天門会には「基本会」と「改造会」の別があるといわれた。¹⁶⁾すなわち、最初から天門会として組織された集団と他の会から「改造」された集団の二種類があったという。

勢力を拡大し影響力を増した天門会には、知識人の参加も見られるようになった。たとえば郭金昆（郭厚齋）は韓欲明の親戚で秀才であったが、韓欲明に信頼されて軍師の役割を果たしたとされ、「欲」の字を名前につけた会の中核分子四十人の秘密会議にも出席を許され、「第二韓欲明」とも称されたという。李見荃は、知識人・文人への韓欲明の対応について次のように記している。

「欲明は残忍で猜疑心が強く、文人を嫉視した。……生員の韓樹勳父子を殺したのは、スパイではないかと疑ったからであった。国会議員某（閻嘯台）を半殺しにしたのは、軍隊の派遣を要請したと疑われたからであった（『天門会始末記』）。

張学良軍の将校で、一九三〇年頃韓欲明の参謀役として行動をとまにしていた杜大中も次のように述べている。

「韓裕明（韓欲明）の日常生活は、労働人民のそれであって、良くない嗜好は何ももたず、衣食も質素なものであった。しかし、字を識る者をもっとも嫌うという特徴があった。彼は、字を識る者に好人は少ないと思っていた。口八丁手八丁の知識人はとくに嫌った。舞台の上でのくまどりで、兎のような耳と猿のような頬をもった悪賢い奸臣面の知識人を見れば、思いのままに殺害した。しかし、舞台上の忠臣面の、角顔に大きな耳、やさしい眉に良い眼をし

た人を、彼は大変尊重した。林県の読書人で、とくに外地の洋学堂（西洋式の学校）に行った人で彼に殺された者は大変多かった。しかし、彼は自分の村から五里離れた所に住んでいた前清の秀才の郭厚齋のことは大変尊重して、何かにつけて彼の協力を求めた。事後の郭の話では、当時心中ではそうしなかつたのだが、あえて逆らわなかつたのだという。なぜ郭がずつと韓に尊重されたか、その原因を考えてみると、郭の様子が舞台の上の忠臣の相貌をしていると韓が見たからだろう。また、県城の南関に李姓の挙人（実際には進士の李見奎のこと）がいて、やはり同じ理由で韓の尊敬を受けていたが、李は高齢だったので出馬して協力することはなかつた⁽¹⁷⁾。

杜大中の見るところ、韓欲明は人相の良し悪しで人を判断したことになるが、李見奎の文章からも読み取れるように、知識人一般を敵視したというよりも、天門会に敵意をもち、「神聖な活動」を蔑視して敵対的行動をとった者は容赦なく抹殺したが、自らに与する者には敬意をはらって鄭重にこれを選んだという方が妥当なところであろう。文盲であつた韓欲明は、庶民を支配の対象とする北京政府から県に至る官僚組織とそれを支える知識人に二律背反的な感情をもつていたものと思われる。宗教的反乱者が、皇帝権力に拮抗するかたちで自らを相手に似せて組織し、家長的・権威主義的統治権力を作り出していくことは中国民衆反乱史の通例であつた。韓欲明の場合も、天門会の勢力が強大化するにつれて、既存の政府を模して設置した権力機構・「八大処」の上に立つ「独裁君主」を自ら演ずる一方で、天門会の制圧下の民間では会徒による「迷信」的活動が満開となり、復古的傾向が強まった⁽¹⁸⁾のは、そのことを裏付けているように思われる。

(3) 宗教活動の停止と天門会集団の解体

一九二八年三月、馮玉祥系龐炳勳軍との戦闘に敗れた天門会の「基本会隊」(中核部隊)⁽¹⁹⁾は、県城を放棄して太行

山の山間部に退却し、菩薩巖にこもって抵抗したが、十カ月後の二九年一月に包囲を突破して逃れた後各地に分散した。韓欲明は、郭金昆など数人をともなって東北の瀋陽に赴いて、張学良の庇護の下に入った。張学良は、一九二七年秋に奉天軍が河南省より撤退した時に天門会の援護を得たことを徳として、韓を厚遇した。この様子を杜大中は次のように述べている。

「韓が瀋陽に来てから、張学良はその住居を世話し、生活上も優待した。王以哲等の将領がしばしば韓を慰問に訪れた。一九二八年（一九二九年）の双十節に、張学良が北大宮で閱兵した時にも、韓の出席を要請したし、何かの記念日に司令長官公署で祝賀会があれば韓に参加を求めた。韓は瀋陽で二年近く（実際には一年未滿）を過ごした。この間に韓の知識は大いに増した。蔣斌（東北電政監督）が私に笑いながら言ったことがある。韓がある時蔣にこう言ったという。『以前私は字を識る者に好人はいないと思っていたが、今になって考えてみると、何かをなさそうとする者は字を識らなければならない』。……さらに彼は東北軍の軍政人員が迷信を信じていないのを見て、自分が過去にやっていた天門会の迷信活動は笑うべきであると感じた（と述べ）、これ以後再び天門会の事を話さなくなつて、韓復生と改名した。以前の自分は死に、これからの自分は生まれ変わったものになるという意味である」。謀士の郭金昆も、杜大中に「韓復生は以前は天門会だったが、東北から帰つてからは、完全に会門を捨て去るだろう、また他人が過去の天門会のことを話すことさえ嫌っている」と述べたという²⁰。このように、これまで山間地域の農民として限られた世界の中で生きてきた韓欲明は、東北の大都市・瀋陽で近代化された軍隊をはじめ様々の近代的文物に触れたことで、これまでの活動を否定して、自身の「再生」を志した。その意味はおのずと明らかであろう。ここで、韓欲明は「心を勞して人を治める者」の側に上昇転化を図つたのであり、山間部の土俗の慣習や民間結社の伝統との訣別を思い立つたのである。

一九二九年末の冬に韓欲明は、張学良に謝辞を述べて瀋陽を去って、林県に隣接する武安県に潜入した。

「十八年三月龐軍去って、冬に欲明はひそかに武安県に戻ってきた。彼は復生と改名し、旧部下を招集して、その数は二・三百人になった。某軍人がその力を利用しようとし、一団（連隊）に達したら遊撃隊として招こうとした。

欲明はその招きには応じなかったが、その後団長（連隊長）と称して団師と称せず、また壇を設けて神を敬うこともせず、もともとの特徴（本来面目）はなかった。……十九年三月一日、林県に進入したが、保安隊はこれを防御できなかつた。（韓は）任村・姚村・桃園・合澗を占拠して、曉諭を告示して、以前（の行動）は誤りであった、今後は功を桑梓（故郷）に立てて以前の過ちを償いたいと極言した。そして、人に会えば煦煦然として（愛想よく）握手の礼をした、とくに士大夫に敬礼した」（天門会始末記）。

こうして韓復生は、宗教的活動と天門会の名称、そして天門会総団師としての韓欲明の名前を捨てた。青年時代の韓は、頭には辨髪をつけて、古風な藍色の綿入れの上着とズボンを着て、いつも手に刀と鞭をもっていた⁽²¹⁾。しかし、帰還して林県知事主催の歓迎大会に臨んだ韓は、洋服を着てシルクハットをかぶり、革靴をはいて手にはステッキをもっていた⁽²²⁾という。宗教的活動の停止は、また民衆の精神世界につながる回路が閉ざされたことを意味している。天門会を名乗らず、神壇もなく、焼香叩頭の宗教的活動もしない韓復生集団は、ただの地方軍（雑軍）に過ぎなかつた。当然彼の下に結集するかつての天門会徒は少なかつた⁽²³⁾。戦乱は収まりつつあり、前回の敗北で天門会の声望が低下し、支部の多くが民団に改編されたという環境の変化はあったとしても、かつて韓を支持した農民から見れば困惑すべき変貌ぶりであつたらう。韓復生の将来は、少しでも多くの部下を養うに足る給養を保証してくれる軍隊にできるだけ高く自らを売り込む道以外にはなかつた。そして、張学良と連絡をとりつつ、石友三部隊の旅団長、張鈞部隊の混成旅団長と渡り歩いて失敗を重ね、時とともに弱体化して、最後には地元の保衛団長に任命されることを望

んで、綏靖督辦劉鎮華の謀計にかかり、一九三一年一月、馮貴徳・范義・王徳榮ら幹部とともに新郷で銃殺された。集結に遅れたため難を免れた一個中隊の残党は、韓復生の甥の韓欲立を「皇帝」に擁立して安陽県西部の清涼山を拠点に活動した。実際の指導権をもっていたのは「大將軍」の王振国であったという。この部隊は、翌年春、中共河南省委員会より派遣されてきた楊介人の提言にしたがって、民衆にアピールしうる天門会の名称と旗を復活し、そして、一九三三年八月に、林県・武安県境の山間部に根拠地を形成するために移動するところを、民団軍に捕捉されて壊滅した。捕らえられた韓欲立は処刑に臨んで、「今年二十七歳のわたしは、二七年後に林県に帰ってきて皇帝となるだろう」と叫んだという。⁽²⁵⁾ 王振国と楊介人は包囲網をかくぐって逃れた。楊介人は、一九二六年冬に中共黨員として最初に天門会に接触し、奇しくもその最期にも立ち会うことになった。⁽²⁶⁾ また、「大將軍」の王振国のその後の経歴は、仮に韓復生が生き延びた場合に遭遇したであろう運命を暗示している。『林県志』（二十巻人物、一九八九年）に掲載されている王の略伝は次のように書かれている。

「王振国（？—一九四七）、原名は王玉鎖、字は安邦、林県東崗郷南丁冶村に祖居す。民国初年、觀花水村に転居して居住し、王姓の山地を開墾して耕作する。王振国は少年のころより深山の中で生活し、毎日開墾・柴刈り・放牧・兎狩り等で山を平地のように跳び回り、槍投げ・石投げでは百発百中の腕となり、放蕩不羈・専横野蛮の性格をつちかった。一五歳になると、仲間と交わりを結び、あちこち奔走して、一定の勢力をもつに至った。

民国一四年（一九二五）、王振国は清道会に加入し、武術拳法を習い、略奪行為・飲み食い欲楽を極め、郷里に覇を称え、前後して四人の女性を無理やりに妾にした。

民国一五年（一九二六）、天門会農民蜂起が起こった。王振国は天門会が清道会よりも強大であるのを見て、清道会を離脱して天門会に参加した。そして東崗一帯に遊雜武装（遊撃的不正規軍）を發展させ、韓欲明に協力して戦っ

た。民国二年（一九三二）、天門会が清涼山で活動した時には、韓欲立を首領に推し、王は軍事指揮にあたった。翌年八月、王振国は韓欲立と一緒に、天門会の会衆を率いて清涼山を撤収して林県に戻ろうとしたところ、民団の迎撃を受け、天門会は敗北し、王振国ら少数は包囲を破って逃走した。

民国二五年、王振国は国民党に帰順して、東崗区の保安隊長に任命された。民国二七年には、地方の民団団総になり、不断に実力を拡充して、一つの兵工廠（武器工場）を開設し、林県で最も強力な武装勢力となった。常に八路軍と摩擦を引き起こし、社会秩序を混乱させた。

民国三二年、孫殿英・龐炳勳・李同秀が前後して日本侵略軍に投降した後、王振国とその部下も日偽武装（傀儡軍）として改編された。彼も太行保安隊第五支隊隊長に任命された。いつも人を引き連れて食料や物品を略奪し、民衆の財産をゆすりとつたため、林県の人民から『胡掠隊』と呼ばれた。

民国三三年、林県全域が解放された後、王振国は部隊を率いて湯陰県に潜入し、引き続き人民の敵となっていた。民国三六年四月、国民党新編第四軍が湯陰県で人民解放軍に包囲されて全軍が壊滅した時、王振国は副司令の劉月亭に背いてピストルをもって包囲を突破した。劉月亭は必死に逃げ延びた後、王が自分の醜態を知っていることが不安になり、ひそかに衛兵に命じて王を荒野において銃殺させた。

その末路から溯って王振国の行動を解釈した感のあるこの略伝によれば、天門会の敗北後に、王は故郷に戻って国民党支配の末端を支える保安隊・民団のリーダーにおさまっていたが、国民党系の地方軍が総崩れとなった日中戦争後期には再び雑軍的体質を全面開花させて、「反人民的活動」に明け暮れたことになる。かくして、韓欲明は「義軍首領」として、王振国は「人民の敵」として、後世に伝えられることとなった。

2 浚県（濬県）天門会の展開

(1) 楊貫一の履歴

浚県天門会の歴史は、その指導者・楊貫一と切り離しては考えられない。楊貫一とはどのような人物だったのか。喬培華氏の研究成果に依拠してその略歴を追ってみよう。⁽²⁷⁾

楊貫一は、一九〇三年に浚県三角村の地主の家庭に生まれた。そのころ楊家は二百余畝の土地と五〜六頭の家畜を所有していた。一九二二年頃、父・楊茂林は振興酒店という酒店を開いたが、事故が起こって失敗、一九一五年頃には、同心成という屋号で高利貸を始め、さらに、一九一七年頃、同心堂という屋号の薬店を開いた。この収入によって新たに土地を購入したため、所有地は五百余畝になり、家屋の部屋数は百余間、家畜は一四〜一五頭、長工六人（農繁期には短工二二〜二三人）・会計（管賑先生）一人を雇う浚県有数の地主に発展した。一九二八年頃には、執事（管家）が一人、会計（管賑）が三人、そのほかに炊事夫が一人いたという。

楊は、一〇歳で私塾に入り、三角・宜溝・浚県城等の地で勉強したが、二四歳の時（一九二六年）に土匪が学校を略奪したために閉校となって中断をよぎなくされた。楊家は付近数十里以内で著名な富戸であったため、土匪の目標となり、一九二六年冬には叔父が誘拐・殺害された。衝撃を受けた楊茂林は、林県为天門会に加入すれば「土匪に抵抗し災害を避け、家業を保衛」することができる⁽²⁸⁾と聞いて、息子の貫一に村の青年二〇名を連れて林県に行って天門会を学ぶように命じた。一九二七年、修行を終えた楊貫一は伝師になって、村に帰って天門会の壇を開設し、「文帝上神は靈驗あらたかで、天門会は槍・刀・炮を避けられる」と唱えた。天門会は同地域一帯に拡大し、一九二七〜一

九二九年のころ、浚県と湯陰の両県の一一〇ほどの村に天門会ができて、会員は七千八百人に達した。一九二八年末、林県の天門会本部が龐炳勳軍との戦闘に敗れた後、浚県の天門会も馮玉祥系の省政府の命令によって民団に改編され、浚県屯子所自衛團（団総は楊茂林、その後楊貫一が継承）となった。一九三三年、楊貫一は三角郷聯保主任を委任されるが、一九三五年になると、聯保主任は国民党の訓練を受けた者でなければならなくなって辞職し、村で教書の日々を送ることになった。

一九三七年夏、七七事変が起こり、戦時の無政府状態の中で土匪の活動が活発化したため、楊貫一は天門会を復活させた。一九三八年には、浚・滑・湯陰の三県の三百余の村の天門会の会員は三万人にもなった。⁽²⁸⁾

ここで興味深いのは、国民党の地方支配と地方指導者（ローカルリーダー）として楊貫一の関係である。楊は、当初郷の自衛組織の責任者に任命されたが、国民党の支配が安定に向かい、地方の保甲制を支える責任者は国民党員か準党員でなければならなくなって辞職を迫られ、三十歳そこそこで隠居生活に入っている。しかし、日本軍の侵攻によって国民党による行政支配が解体されると、地方の輿論をまとめて混乱を防ぐ責任を担いするのは楊貫一のような存在であった。王振国が民団団総に任命されたのと同じ三八年、楊は、国民党十三行政区專員丁樹本によって北聯絡站站長に、浚県長李慶西から浚県自衛團団長に任命されている。国民党は地方の民間武力を掌握しうる郷村指導者に秩序維持をゆだねたのである。こうして楊貫一は再び戦乱の予北に登場することとなった。

(2) 抗日戦争時期の天門会と諸勢力

この地域でもっとも有力な民間武装組織である天門会は、対立する諸勢力の注目するところとなって様々な形で働きかけが行われた。

先に述べたように、一時期楊貫一を冷遇した国民党は、不利な戦況の中で、実際に地方の民衆を天門会に組織している楊に公的な職位を与えて管轄下に置こうと企図した。一九三八年、国民党浚県党部書記の王振延は、県党部委員の斉耀先・朱茂亭に数名の部下を率いて天門会に参加するよう指示した。楊貫一は彼らの加入を認めて幹部として遇した。そして、二年後の再編成時に、斉は副参謀長、賈東園は副会長、李子斌・張心良らは中隊長に任命されることとなった。国民党はこうしたかたちで同党の勢力を民間に保存して、天門会の指導権を握る機会をうかがっていた。また、かつて林県天門会と交戦した国民党四十軍軍長龐炳勛は、天門会を同軍に編入して楊貫一を師団長に任命する旨の委任状をもった部下を何度も三角村まで派遣したが、楊はこの申し出を謝絶した。

翌三九年、楊貫一の老朋友・常仙甫の紹介で胡紫青（常の女婿）²⁹が、続いて付凌雲（常の親戚、浚県抗日政府秘書）が天門会に参加した。胡は天門会の状況を調査し、黄友若（冀魯豫軍区敵工部情報股股長）・常仙甫・付凌雲と相談した上で、楊に接近してきたのであった。当初本部の文書係（文書先生）をつとめた胡は、その広い知識と的確な判断力によって次第に楊の信頼を得るにいたった。後述のように、一九四〇年春に楊貫一が日本軍によって拘禁される事件が起こった。その時の経験から、胡紫青は人数が多いが戦闘力が弱く機動性に欠ける天門会の組織改革を提案し、楊はこれを容れて生産と結合している農民部隊から常備軍に相当する「浚滑湯天門会総隊」を分離し、三角村に常設機関・「浚滑湯天門会総弁事処」を設置した。総隊長には楊貫一が、副総隊長には常仙甫・魏仙章・賈東園が、参謀長に胡紫青が、副参謀長に斉耀先がそれぞれ就任した。浚・滑・湯陰の三つの県にはそれぞれ弁事処が置かれ、拠点の四か村には大隊が、その下に十二の中隊・三三三個分隊が置かれ、全体で一二〇〇余人の常備武装が成立した。楊貫一の相談役となった胡紫青や付凌雲は、黄友若・鄭建国をはじめ中共黨員を次々と楊に紹介して天門会に参加させた。こうして、天門会管轄地域における共産党組織は発展を続け、一九四五年八月には二六〇余人の黨員を擁する

にいたり、常備武装の中隊・小隊幹部の大部分は共產黨員であったという。

当時、胡紫青の上級にいた趙紫陽（冀魯豫区党委員会二地区委員会書記）の回想によると、「地区委員会の天門会地区に対する工作方針は、胡紫青の影響（力）を通して、楊貫一を味方につけて дайに我々に依存するようにさせると同時に、その下層の常備武装の中での工作を展開して時期を待つ。その他に、天門会の上層工作による掩護を利用して当地の統一戦線工作・大衆工作与党組織を發展させる工作を展開する」というものであった。紅衛兵の迫害の中で書かれた胡紫青の遺稿では、天門会工作の任務は、「①天門会を掩護として敵偽軍の情報工作を展開する、②地下の党組織を發展させ、太行地区と冀魯豫地区の間の秘密交通線を建設する、③次第に天門会の武装力を掌握して、一定時期に地下軍の蜂起を行う」こととされている。共產党は、地方指導者として人望のある楊貫一を前面に押し立て、天門会という民間の組織の中に隠れて秘密活動をおこない、黨員と地下軍を拡大して来るべき蜂起に備えていたといえるだろう。

日本軍の側でも、農村地域に広範に展開している民間武装組織には注目しており、一九四〇年春には、河南省北部一帯の天門会・紅槍会・黄槍会・大刀会等の首領を屯子鎮に招集して会議を開き、その懐柔をはかった。日本側は、影響力のある楊貫一が日本軍に服従し協力する旨の発言をしてくれることを期待したが、楊は喉の病気を口実に口を開かなかった。そして、昼食の酒席で日本軍小隊長の沼館は、「お前は馬鹿だ、八路の仕事をしている」との暴言を浴びせ、黙っていた楊貫一をピストルで脅して警察所に拘留した。急を聞いて駆けつけた天門会千余人は会場を包囲し、釈放を要求した。事態の急展開に驚いた日本軍は下級將校の無礼な行動に遺憾の意を表し、偽県長潘景陽の仲介によって天門会指導部と交渉に入った。天門会は、「①天門会総部所屬の屯子鎮の日本軍は撤収する、②地方の治安は天門会が維持する、以後屯子鎮に日本軍は駐屯しない」という要求を提出し、日本軍はこれで天門会の協力が得ら

れたものとして合意した。これ以後天門会は「偽化」（親日傀儡化）し、半年後に、屯子鎮の日本軍小隊は撤収した。一九四三年一〇月、太平洋戦線への兵力転用によって生じた軍事力の不足を傀儡部隊で補おうとする日本軍は、湯陰県伏道集の大廟に「月部隊興亜義軍司令部」を設立して親日武装勢力の一層の利用を図った。楊貫一は、天門会の常備部隊の中から二百余人を選抜してこれに参加させた。この「月部隊興亜義軍」の司令には上田長造（浚県顧問、別名張子龍）が、副司令には潘景陽（浚県偽隊長、中将）・楊貫一（少将）・賈東園が、参謀長には胡紫青（大佐）が就任した。そして、この部隊の軍服・給養等の経費はすべて日本軍から支給されたという。

このように日本軍に「協力」する一方で、楊貫一は胡紫青を介して、八路軍冀魯予軍区指令員の楊得志との間でも、「①天門会は日本軍に従って根拠地を掃討してはならない、②天門会は現有の範囲でだけ活動しうる、③共産党の工作人員が天門会地区を通過したり、活動する時には安全を保証する」という内容の密約を結んでいたのである。そして、実際に一九四五年に至る四年余の間に、天門会が掌握する「交通線」を安全に通過した共産党関係者は、劉少奇・陳毅・鄧小平をはじめ二千余人に達したといわれる。

八路軍と「協定」を結んだ民間武装集団が天門会だけではなかったことは、安陽の程道合・程道生兄弟に率いられた武装集団や王自全集団の例からうかがい知ることができる。程兄弟は、安陽県太保村の貧民出身で独自の武装集団を組織していたが、抗日戦争開始後勢力を拡大し、安陽・内黄・湯陰の三県の百余の村を制圧していた。一九四一年、程兄弟は、八路軍の提出した三条件・「①衛河を越えて活動しない、やむを得ず日本軍に従って『掃討』にあたる時には事前に八路軍に情報を送る、大衆を騒擾しない、②八路軍の人員の通過及び物資輸送の安全を保障する、③八路軍の代表を程部隊内に駐在させる」を受け入れたという。また、王自全は安陽県王隆化村の佃農出身で、民団の兵士などをしていて、安陽陥落後自ら司令と称して実力を拡充した。一九三八年秋、四百余人の部下とともに八路軍に

帰順したが、「匪性改め難く」、八路軍の同意を得て故郷に帰り、そこで地方の保護を旗印として「安(陽)・臨(漳)・内(黄) 聯防自衛團」を組織し、ひそかに日本軍と結託していたという。一九四三年、「華北掃共軍」第一路第一支隊司令に、翌年には「靖安軍」独立第二旅団長に就任して部下二、三千人を指揮していたが、彼も八路軍地下交通線を通して幹部の安全と武器・物資の輸送に便宜を図っていたとされる。³²⁾ この二つの集団も一定地域を支配する民間の土着武装集団として、一時期共産党と連絡を維持していたが、抗日戦争後ともに国民党軍に投じたことで「人民の敵」として粉砕されている。

日本の降伏の情報が伝えられた一九四五年八月一〇日夜、冀魯豫軍区敵工部長の王楽亭が屯子鎮に來訪して、楊貫一・胡紫青・付凌雲・宋再明らを集めて会議を開き、天門会がただちに蜂起するよう求めた。楊貫一はこれに同意し、蜂起の具体的準備に取り掛かった。翌一日、天門会は屯子鎮に終結して、電線と道路を破壊し、日本軍・傀儡軍の軍糧を没収した。一二日には、屯子鎮で大衆集會が開催され、天門会の蜂起が宣言された。こうして天門会常備部隊は、六百余人と六百余丁の銃・五〇頭の戦馬からなる八路軍冀魯豫軍区浚湯支隊として再編成された。支隊長には楊貫一が、副支隊長には共産党員の胡紫青と宋再明が任命された。蜂起に反対した齊耀先・張心良らは射殺され、李子斌らは数百名の天門会員を率いて逃亡し、国民党軍劉月亭部隊に合流したという。浚縣天門会はここに解体された。

おわりに

以上概観してきたように戦時中の楊貫一の行動は一筋縄ではいかない複雑な軌跡をたどっている。表向きには日本軍の管轄下にありながら、天門会内部には共産党員も国民党員も含まれており、両党とそれぞれ連携を維持している

のである。しかし、ただ一つの点では一貫しているとみることが出来る。すなわち戦乱の被害が天門会に参加した村落に及ぶのを避けるために最大限の努力をはらっていることである。実際にこの地域の農村は直接的な戦禍にさらされることはなかった。一昨年三角村を訪問した時に、老天門会員から「日本軍は敵ではなかった」という発言を聞いた。

同じような立場にあった程兄弟や王自全とは異なっており、決定的瞬間に楊貫一が共産党に与する道を選択したのは、胡紫青に対する信頼感、彼を通して伝えられた同党の柔軟な対応、強力な八路军の存在と抗日戦争に果たした役割などの要因によるのだろう。結果から見ると楊貫一はずっと共産党との関係を基軸として行動してきたようにみえる。喬培華氏は一九四五年八月の起義に至る経過を必然的な帰結として説明している。しかし、「天門会総隊」の設置に際しても、「興亜義軍」への参加に際しても、その人事は国共両党のバランスがとれるように周到に配慮されているように見える。程兄弟や王自全が国民党を選び、楊貫一が共産党を選んだ、この両者の運命を分けた選択の差は紙一重だったのではないだろうか。

建国後三角村には、八路军によって天門会の功績を讃える石碑が建てられ、その功績によって関係者は要職に就いた。しかし、「文革」時期には、日本軍・偽軍との関係、会道門である天門会との関係が問題とされて、紅衛兵の激しい批判・攻撃にさらされ、石碑も破壊され、関係者とその家族もさまざまな迫害・差別を受けた。楊貫一は、内戦期に浚県民主政府県長、解放後新郷地区水利局長等を歴任したが、「文革」時期、紅衛兵によって「大漢奸」として迫害を受けた。しかし、その苦境をくぐり抜けて、一九七九年に名誉回復（平反）された後に、一九八一年四月に七九歳で病死した。一方「天門会爭取工作の功労者・胡紫青は、河南省公安厅副庁長・河南農学院書記等を歴任したが、やはり「文革」時期に、「日偽漢奸」「国民党員」「天門会頭目」「地主分子」等と批判され、一九六九年一月三〇

日迫害によって五三歳で死亡した。四人組失脚後まで生き延びた関係者は、冤罪・誤審の再調査によって名誉回復の措置がとられることとなった。一九八〇年代には、連続テレビドラマ「天門精鋭」が放送されたという。

一九九三年の河南天門会故地訪問に際しては、現地での手配・折衝について河南党校副教授喬培華・高全余両氏に大変お世話になった。また、難解な林県方言による応答録の原稿化については、喬培華氏と李恩民氏のご援助がなければとても不可能であったろう。浚県人民政府和宝鏡宣伝部長には三角村でのインタビューの際にいろいろとご教示を賜った。

(注)

- (1) 「国民革命時期の北方農民暴動」(野澤豊編著『中国国民革命史の研究』青木書店、一九七四年)。
- (2) 「伝統的農民闘争の新展開」(『中国近現代史講座』第五卷、東京大学出版会、一九七八年)。
- (3) 「天門会発祥の地を訪ねて」(『近きに在りて』一七号、一九九〇年五月)。
- (4) 天門会についての唯一の研究書・喬培華『天門会研究』(河南人民出版社、一九九三年)は、同氏の一連の天門会研究を集大成したものであり、そのもととなった関連論文には、①「日軍対天門会的懐柔政策及其破産」(『史学月刊』一九九二年第一期)、②「冀魯豫抗日根拠地与天門会」(『歴史教学』一九九二年第七期)、③「天門会内部結構分析」(『南開史学』一九九二年第二期)、④「大革命時期中共対天門会的認識与改造」(『歴史教学』一九九三年第七期)、⑤「抗戦中的豫北天門会」(『中外学者論抗日根拠地』档案出版社、一九九三年)などがある。その中で①については森久雄氏による全訳と解説が『中国研究月報』一九九二年一〇月号に、②については九田孝志氏による紹介と論評が『広島大学東洋史研究報告』第一四号(一九九二年)に掲載されている。

- (5) 山雨「南直豫北民衆反抗奉軍情形」(『嚮導』一八八期、一九二七年二月一六日)。
- (6) 子貞「反奉戰爭中之豫北天門會」(『嚮導』一九七期、一九二七年六月八日)。
- (7) 韓欲明の前半生についての『林県志』(第二〇巻人物、第一章人物伝)の記載は次のとおりである。「韓欲明(韓根・韓金貴、一八九五—一九三三)、小名韓根仔、また韓復生の名も用いた。林県小店郷東油村の人、農民兼石匠出身。一家四人で三間のあばら家に住み、山沿いの三畝の土地を耕作する。生活は貧しく、普通は一日に二食。生活の迫るところにより、彼はよく山西省陵川県一帶の鑛石に行つて臨時工をした。民国十二年、韓欲明と本村農民郭官林は天門会を組織することを思い立ち、ひそかに会員を増やした。民国十五年、韓欲明は郭官林に代わつて壇主となつた。天門会を大きくするために、三六人の会員を選抜して骨幹とした。すべて『欲』の字輩をもつて呼び、彼は総団師となつた。同年四月、彼は自分の家の門に大旗を樹て、武装蜂起を挙行した。ちなみに、東油村で韓海章氏より借覧した『韓氏族譜』に、韓金貴は「義軍首領」と記されている。この族譜は、一九九二年に同村村民委員会によつて作成されたものであつたが、あまり大切に保管されていなかったため鼠に齧られて一部は判読不明になっていた。
- (8) 喬培華前掲書、六七頁。
- (9) 梁心明「大革命時期北方農民起義—天門会—」(『河南文史資料』第一一輯、一九八四年)、一五頁。梁は林県馬店村の人で、一九一八年の生まれ、解放前に中共県委員会書記、建國後には、吉林工業大学副校長・鄭州市統戰部副部長などを歴任した。少年時代に天門会の活動を直接見聞しており、二兄は同会の分壇壇主(支部長)であり、また天門会工作にあつた中共黨員の郝建助は親戚にあたることから、天門会に対して「深厚な感情」をもつた人物であつた。
- (10) 東聖道は、東道・皇家聖道・黃道門などとも呼ばれる秘密結社で、清の嘉慶二五年(一八二〇)に湯陰県より林県東姚区南溝村に伝えられ、光緒二六年に入道者は一二〇〇人に達し、東姚・澤下・臨淇等の村に分布した。「東聖道は迷信の方法で、神を求め業を拝し、民財をだまし取つて、社会秩序を攪乱した」とされ、一九五〇年に徹底的に取り締まれた(『林県志』第一九卷社会、第六章幫会)。
- (11) 鈴木中正『中国史における革命と宗教』二〇五頁、東京大学出版会、一九七四年。

- (12) 喬培華前掲書、五〇頁。
- (13) 喬培華前掲書、七六頁。
- (14) 梁心明は、文帝上神廟が俗に金鑿殿と呼ばれたように、韓欲明のことを「真龍天子」と伝えた郷民がいたことを指摘している(梁心明、前掲、一九頁)。
- (15) この部分は、『磁縣縣志』(第九章宗教、一九四一年)、喬培華前掲書、金度「天門会的興衰」(『河北文史集粹』社会卷、河北人民出版社、一九九二年)、「天門会農民起義」(『林県志』所収一九八九年版)、崔祖澤「天門会在輝県」(『河南文史資料』第一輯、一九八四年)、「天門会在涉県」(『林県文史資料』第三輯、一九八七年)、「涉県天門会活動紀実」(『邯鄲文史資料』第三輯、一九八六年)による。
- (16) 侯武昭遺稿「天門会始末紀略」(『河南文史資料』第一輯、一九八四年)、六三頁、崔祖澤、前掲文、八三頁。
- (17) 杜大中遺稿「我同天門会首韓裕明的接触」(『河南文史資料』第一輯、一九八四年)、三四頁。
- (18) 林県城を占領した天門会が、県城の權威を象徴する城隍廟内の神像を破壊し、廟を銃砲工場に改築したことは興味深い(「天門会農民起義」)。
- (19) 天門会の中核部隊を破った龐炳勛の軍は、同会の本部の所在地・油村を焼き払った。この消息が伝わった村では、壇を自ら撤去し、文帝上神の位牌を隠して、天門会員であったことを示すものは一切焼き払ったという(侯武昭、前掲文、六四頁)。
- (20) 杜大中、前掲文、四一頁。
- (21) 侯武昭、前掲文、五九頁。
- (22) 喬培華、前掲書、一一一頁。
- (23) 形成が悪くなったのを見た郭金昆も、まもなく韓の下を離れて故郷に帰った。郭は解放後に鎮庄されたという(侯武昭、前掲文、六九頁)。
- (24) 東油村の農民の中には、韓欲明は新郷で処刑されずに日本に渡って生きていると信じている人がいた。初めてこの村を訪れた時に、あなたは日本人なのだから韓欲明が何をしているか知らないかと質問されて戸惑ったことがある。韓欲明が新郷市

で銃殺されたことは各種資料に明らかにされている事実なのだが、処刑の現場を見ていない村人からすれば郷里の英雄がなお健在であることを信じたいのであろう。

(25) 慕中岳「一九三三年林県天門会消滅経過」(『河南文史資料』第一輯、一九八四年)、七八頁。

(26) 楊介人(一八九九—一九三六)、字廉泉、乳名福泰、河南省沁陽県崇義村の人。一九一九年末上海よりフランスへ出発。

パリで共産主義青年団に加入。一九二四年、モスクワの東方大学で学習、中共入党。その年の冬に帰国。京漢鉄道と安陽の労働運動に従事。一九二六年冬天門会工作のため林県に派遣される。のち天津で労働運動に従事中逮捕されて殺害される」(『安陽県志』一一二頁)。中共と天門会の関係については、別の機会に検討したい。

(27) 浚県天門会については喬培華『天門会研究』(第六・七章)の他に申仲銘「抗戦中の浚県天門会」(申仲銘編著『民国会門武装』一九八四年、中華書局)と陳習勤・張穎「従天門会到冀魯豫辺区浚湯支隊」(『林県文史資料』第三輯、一九八七年)及び『湯陰県志』を参照した。とくに喬培華氏の著書は、「文革」中に書かれた楊貫一と胡紫青の「遺稿」(『供述書』)や浚県党史微編弁公室に保存されている外国人には公開されていない档案資料に基づいてまとめられた優れた表証的研究であり、浚県天門会と楊貫一についての事実関係の多くはこの著書に拠っている。

(28) 「楊貫一生平」(喬培華前掲書所収)。

(29) 胡紫青(一九一六—一九六九)は、浚県人、父が県長等を歴任した官僚の家に生まれる。開封で初等教育を受け、一九三一年上海中法工学院予科に進学し、抗日運動に参加。一九三四年北平の中法大学に入学、七七事変後浚県で抗日義勇軍に参謀として参加したが、日本軍・傀儡軍の攻撃で失敗、胡の家産は没収された。胡は岳父の常仙甫(浚県裴荘の郷紳、「革命老人」)の家に身を寄せたが、常の感化で共産党に接近し、八路軍総部直属の華北抗日民軍の情報員となり、天門会工作にあたることとなった。一九四一年中共に入党。

(30) 趙紫陽「浚県地区地下党組織有关情况」一九七〇年六月二十九日(喬培華前掲書所収)。

(31) 胡紫青遺稿「我与天門会」一九六八年(喬培華前掲書所収)。

(32) 『安陽県志』人物編(中国青年出版社、一九九〇年)、一一四九頁—一一五二頁。

資料、天門会関係訪問記録

1 東油村老天門会員及び韓欲明親戚訪問記録

時：一九九三年一〇月二六日

所：河南省林県小店郷東油村村民委員会会議室

応答者：路永貞（老天門会員、九一歳）、韓丑文（老天門会員、九二歳）、田貴長（韓欲明の外甥、七四歳）、韓文才（韓欲明の外甥、七五歳）、韓海章（韓欲明の外甥・継子）

問：あなたが天門会に参加した時はいくつでしたか（路永貞） わたしは二二歳で結婚した、天門会に参加したのも二二、二歳のころだった。

問：そのころ二〇歳くらい若者はみな天門会に参加したのですか（路永貞） そうだ。当時、わたしは輝県で職人をしていたが、「おまえの村に会道門が起こったぞ」と言ってわたしにそのことを訊いた者がいた。実のところ、わたしもそのことは知らなかったもので、急いで故郷に帰った。家に着くとすぐに会に行つて天門会に参加した。そしてわたしと隣の家で一丁の土槍（旧式の小銃）を買った。

問：あなたは直接韓欲明を知っていますか、彼はどんな様子でしたか（路永貞） 韓欲明だって、わたしは知らないわけないだろう。（手で田貴長を指して）立ってみなさい。おまえの様子は舅に似ている、「外甥は舅に似る」と言うだろう。彼（田貴長）は舅に会ったことはあるが、よく覚えていないだろう。そのころとても幼かったからだ。韓欲

明の顔付き（長相）や背の高さは、おおむね田貴長と同じだ。

問：あなたは、天門会の印鑑の由来を知っていますか（路永貞）知らないわけないだろう。それは俺の親父（路五令）が見つけたものだ。その時、村の路姓で葬式があつて親父は台所に手伝いに行つた。酒を呑み、飯を食つたら、何もやる事がなくなつた。すると、主人から墓に布袋餅を持っていってくれと頼まれた。親父は「よし」と言つて餅を背負つて出掛けた。墓ではたくさんの土が掘り出されていた。親父は墓に行つて大きな赤土の固まりを見つけた。それを足で蹴つたら一つの石印が出てきた。二寸四方のもので、親父はそれを拾い上げ、手でこすつてから、何も言わずに懐にしまった。それを見ていた何人かが「何を懐にしまったのか、俺たちに見せろ」とせまつた。親父が「俺がもつたものをなぜお前らに見せなきゃならないんだ」と答えたところ、その連中は「それはよくない」と言つて親父を取り囲んで殴ろうとした。俺の親父は武術を習得していたので、彼らと乱闘になつた。彼らは四、五人がかりでも親父に勝つことができなかった。親父は石印を家に持つて帰り、ずっとしまつておいた。わたしも常々それに触つていたものだ。

問：石印には何という字が彫られていましたか（路永貞）そこには篆字が彫られていたが、わたしには何という字か解らなかつた。印の両端にそれぞれ字が彫られていた。

問：当時その字を読める人はいなかつたのですか（路永貞）分らない。ただ後になつて天門会に寄付してから、一方に書かれているのが「靈宝大法師」という字であると聞かされた。その後、どこかの人が家にやってきて、石印を譲つてほしいと申し出た。代金は少なくとも数十畝の土地を買えるくらい額の額だつた。しかし、わたしの叔父は「二頃の土地をくれると言つても我々は売らないのに、数十畝程度の価格では話にならない」と言つたので、その人はあきらめて帰つた。また来ると言つて帰つたが、再び来ることはなかつた。このようにして、石印はずつと家の中

に置いてあった。影壁（影牆）の上の箱の中に入れられていたのだ。そのころわたしはまだ幼かったので雨の日には炕（オンドル）の上でそれに触ったのだ。

その後家はとても貧乏になって、生活の迫るところによって、俺の親父はあてずっぽうで人の病気を診てやった。加減の悪い人がいると、彼は紙の上に石印を押して、その家の炕の上に貼ったところ、その人の病気は治った。これも言い伝えだ。親父が死んで、その五、六人の兄弟の家族二十余人が五部屋の家に住んでいた。皆がこの石印を利用して金をもうようと思ひ、売り払おうとは考えなかった。

十余年が経って、天門会が起こった。俺の叔父の息子は天門会の武伝師となった。石印は天門会に寄付した。その後天門会も解散して、石印がどこにいったのか分からなくなった。うわさでは山西に流れて行方知れずになったとのことだ。

わたしには一人の叔父がいて、一番長生きだった。彼が言うには、石印が見つかった場所は棲窪と呼ばれていた。そこには昔大きな寺院があったと聞いたことがあるそうだ。しかし、本人が見たわけではない。当時八十余歳の人も覚えていなかった。

問：あなたの兄は天門会で保管をしていたそうですが、そのことを覚えていますか（路永貞）知らない。その頃わたしは十五、六歳で親父はもう亡くなっていて。家にはさらに八歳の弟がいた。兄が一日中何をしているか知らなかった。彼はほとんど家にいることがなく、昼間は仕事をし、夜も出て行った。家にいる時も、われわれは何も質問できなかった。当社会の規律は大変厳しかったからだ。一度質問したことがあるが、彼は「それを聞いてどうするつもりだ。必要ないだろう」と言っただけだった。

問：韓欲明は、家譜では韓金貴と書かれているし、少名は韓根で、後に韓欲明と改称したと、また韓欲明と一緒にい

た四十余人も名前の中にみな「欲」の字をつけたとされています。何か特別の意味があるのですか(韓丑文) みなそのことを聞くが、なぜだか分からない。当時わたしにも「おまえも欲×と呼ぼうか」と言った人がいたが、わたしは、「俺の母が名前をつけて丑仔と呼んだのだから、改名しなくてもいい。丑は結局丑だ」と言って断った。

問：韓欲明は字を識っていましたか(韓丑文) 字は読めなかった。彼はとても小さい時に父親を亡くして木匠(大工)をしていたからだ。

問：あなたは韓欲明の衛兵をしていたそうだが(韓丑文) わたしは韓さん(老韓)の兵だった。

問：天門会はふだんどんな服装をしていましたか、戦闘の時には特別な服装をしたのですか(韓丑文) 当時何を着たかだ。着るものはふだんのままの自由なものだった。戦闘の時にも衣服はそのまままで紅纓槍をもって前進した。問：天門会が山西で戦った時には衣服を統一したと聞いていますが、そういうことはありましたか(韓丑文) なかった。当時肖軍嶺で閻錫山の部隊と戦った時もみなふだんの服を着ていた。

問：天門会に参加して、戦いに行く時には金が支給されたのですか(韓丑文) 天門会の会員になったら、戦闘するかどうかに関係なく、毎月七元もらえた。袁大頭(袁世凱銀貨)だった。

問：天門会が石友三の部隊に収編された後は、給与と服装はどうでしたか(韓丑文) 緑色の服が支給されたが、金はでなかった。食事は駐屯地で賄った。その民衆(老百姓)からだしてもらった。

問：天門会が張学良の部隊に入ってからはいくらぐらいの金ができましたか(韓丑文) その時わたしは天門会の中にいなかった。天門会は民国十五年に起こって、民国十七年に失敗した。失敗後韓欲明は東北に行った。

問：だれが彼と一緒に東北に行きましたか、同行したのは何人ですか(韓丑文) その時東北軍の李自軍が白区工作をしていて、彼が韓欲明を東北へ案内した。韓欲明と一緒に東北に行ったのは何人もいなかった。

問：韓欲明の二番目の妻のことを紹介してください（韓丑文）彼は東北から帰ってきてから二番目の妻を娶った。東北の人だ。後に韓欲明が死んでから彼女もなくなった。妻は二人とも子供を生まなかった。

問：韓欲明はあなたより年長ですか（韓丑文）もちろん韓欲明の方が年が上だ。彼は申歳でわたしは寅歳だ。彼がもし生きていたら百歳になる。彼は俺より一世代（輩）上だ。俺たちは彼を爺と呼んだ。

問：あなたの子供は何人ですか、体は丈夫ですか（韓丑文）俺の家には子供は一人しかいない。もとは二人いたが、わたしが五八歳の時に一人死んだ。現在二人の孫がいる。わたしはいまでも畑仕事をしている。何もしないでぼんやりしていたくはない。体はまだ大丈夫だ。

問：天門会の武術について紹介してくださいませんか（韓丑文）天門会以前にも当地には武術訓練の習俗があった。天門会が起ってからそれは継承された。しかし、後にまた分かれた。天門会は天門会、武術班は武術班だ。

問：田さん、入会儀式のやり方を見せてくれませんか（田貴長）そのことは、わたしが人から聞いたものだ。入会の時、まず地上に一本の旗を立ててから、入会者は地面に座って服を脱ぎ、背中を見せる。それからまず排刀だ、口の中で何か称えながら、黄表紙に火をつけて、敬神の用とする。最後に黄表紙を頭の上において、体と脚の回りを巡らせば入会となる。天門会に入れば刀槍不入となる。戦闘に出発する時には、黄表紙に火をつけて、香を焚き、叩頭する。ふたたび黄表紙に火をつけて体の回りをこのように巡らす。これが請上法といわれる。このようにすれば鉄砲も貫通しない。いや、これは迷信だよ。このようにして人はぼんやりして刀でも鉄砲でも傷つかないと思ひ込んで肝が太くなるのさ。戦闘の時は死も恐れなくなる。人の言い伝えでは、梟で戦いがあったある時、韓欲明は城東で敵に向かって発砲した。相手は城壁の上から彼に向かって発砲した。彼は地上に伏せたため当たらなかった。彼は起き上がった体をはらったところ、体から十数発の弾丸が落ちたということだ。実際にはこんなことはなかっただろうし、

だれも信じてはいない。ただこれが本当だと思った人もいるということだ。戦闘の時には、口の中で「ヘイ、鉄砲はあたらな（不過槍）、ヘイ、鉄砲はあたらな」と呼び続けた。実際には鉄砲があたらななんてあり得ないよ。

たとえばここに一丁の連発銃があったとして、わたしは避槍法についてあなたに説明しよう。わたしが口の中でぶつぶつと称え、銃が撃てないように鍵をかけて、あなたにわたす。あなたが撃っても弾は発射されない。実際には、わたしは銃を使える、あなたは使えないのだから、わたしが鍵をかけてしまえば、あなたは撃てないわけだ。その結果、わたしが銃の遊底を引っ張ってガラガラさせてあるので、あなたがひっぱっても動かないので、あなたは避槍法は靈験があると思い込んでしまうというわけだ。

問：天門会員は戦闘の時、肌脱ぎになったのですか（田貴長） 伝え聞きだが、肌脱ぎになっただけ。

問：天門会は戦闘の時、腹巻き（肚兜子）をしていましたか（韓丑文） そういうことはない、わたしはふだんの服を着ていた。

問：戦闘の前に祈禱をしましたか（韓丑文） よく知らない。

問：韓欲明は本当に病気の治療ができたのですか（韓丑文） 伝道を始めたころ、かれは善功を行い病を治した。天門会を組織してからは、診察はしなくなった。しかし、彼はいくらか医術の心得があった。父親が医者だったからだ。問：韓欲明が病気の治療をした時どんな方法を用いたのですか、漢方薬を用いたのですか、それとも完全に焼香の灰を用いたのですか（韓丑文） どのように治療したのか、わたしは知らない。その頃とても幼かったからだ。

問：韓欲明の蜂起（起事）の具体的状況はどのようなものだったのですか（韓丑文） もし天門会ができなかったとしたら、韓欲明は貧しくて生活することができなかっただろう。当時、東山の李培英が下条子にやってきて、錢糧を徴収した。必ずすべて差し出すこと、差し出さなかった者は殴ると言った。彼は出せなかったので、連中は彼をひとし

きり殴った。それでも、連中は彼を許さなかった。局面を収集するすべはなかった。李がまた下条子にやってきた時、韓欲明は畑仕事をしていて家にいなかった。関帝廟に行つて数人の仲間と相談して、李培英等の人をひとまとめに始末してしまつた。これがすなわち起事だ。事実は連中が韓欲明を捕らえようとしたが、結果は彼らが韓欲明に始末されてしまつただけのことだ。

2 楊貫一の人柄と天門会の信仰について

時：一九九三年一〇月二九日

所：河南省浚県屯子郷三角村書記楊會義住居

応答者：三角村村民、老天門会員

崔全福（六九歳）、崔振国（七三歳）、楊丙文（八一歳）、楊成敏（七一歳）、尚金山（六九歳）、王尧連（七五歳）

問：楊貫一はどのように人に接しましたか、その人柄はどのようなものでしたか（尚金山）私は楊貫一の衛兵をっていたので、彼との関係はかなり親密でした。楊貫一の人柄は大変立派で、この付近数十里の人はみなそれを知つていて、彼のことを悪く言う者はいませんでした。具体的に言うと、彼の举止は文雅で、老人に敬意を払い、村の長輩に遇えば、貧富にかかわらず先に礼をし、大爺と呼ぶべき人は『大爺』と呼び、大娘と呼ぶべき人は『大娘』と呼びました。天門会の首領になつてからも、衛兵に対して穏やかに接して決して殴つたり罵つたりはしませんでした。楊貫一の家は地主でしたが、家で雇っている長工に対する態度も大変よいものでした。李福宮村の紅磚と呼ばれた長

工はいつも楊買一のことをほめていました。楊買一はいつもほほほ笑みながら穏やかに人に接しました。隣近所の意見の対立やけんかはしよっちゅうありましたが、そうしたことがあると、いつも彼が調停にあたり、当事者を説得しました。人々はよろこんで彼の話を聞き、しばしば彼が一言口を利くと和解しました。

問：あなたがたは楊買一を尊敬しているようですが、かれのどんなところがえらかったのですかⅡ（尚金山）かれはまず土匪を打ってこら一帯の人々の生命財産の安全を保証してくれました。当時戦争の混乱で土匪はとも多かったです。土匪は一度来襲するとめっちゃくちゃに物を取りました。衣服、糧食、目に付いたものなんでも略奪しました。最初民衆はみな大変恐れて、山の上に逃げるか、山の中に隠れるだけでした。ところが楊買一はかれらを恐れることなく、皆を組織して土匪の略奪に抵抗しました。さらに、かれは施しをよくして貧乏人を憐れみました。当時、多くの人は飢餓のために山西・山東へ避難しました。楊買一は、それらの天門会に参加はしたけれど飢えている人に対して、それがどこの村の人であるかにかわりなく、食事を提供しました。

問：天門会の入会儀式はどのようなものでしたか、文帝上神を拜したのですかⅡ（王発連）天門会の入会儀式は、主として排刀でした。これは文帝上神の神位の前で挙行されなければならなかった。儀式を主催する人はまず大刀の峯で新参加者の腹を三回たたいた後、ふたたび大刀の刃を用いて三回切るが、文帝上神の保佑のおかげで傷つかないですみます。排刀の後新参加者は文帝上神に焼香して三回叩頭しなければなりません。それで儀式は完了します。排刀の後には戦闘に参加しても刀槍不入になります。もし銃で頭を撃っても一つのコブができるだけだし、体を撃っても一つの黒点が残るだけなのです。だから、たとえわれわれが紅纓槍をもっただけでも連発銃をもった土匪と戦えるのです。

問：天門会は平時にも武術訓練をしたのですか、紅い布をつけた紅纓槍を用いましたかⅡ（王発連）平時の訓練はそ

う多くはなかった。われわれが使った紅纓槍はふつうの紅纓槍とは違って、前面に飾ってあるのは紅纓ではなくて、黄纓（黄色い紙でつくられた）でした。というのは、命懸けの戦いの時に敵も紅纓槍をもっていて作戦に不利になることを恐れたからです。

問：天門会員は槍（銃）を恐れなかったのですか（王発連）天門会員は槍でも砲でも恐れなかった。楊忠有という者がいて、扈全禄部隊の土匪に頭を打たれて地上に倒れたが、すぐに起き上がってみるとコブができていただけだったので、大声で「鉄砲はあたらなかった、突撃だ（不過槍、衝呀）」と叫んだことがあります。わたしも蓮池村で土匪と戦った時に小銃の弾丸が腹に当たりましたが、黒い点ができただけでした。

問：天門会に参加すると金を支給されましたか、それとも何の報酬もなかったのですか（尚金山）金は支給されなかった。匪賊に抵抗して家を守るためなのだから、みな金などもらわなくてもよかった。

問：それでは、あなたがたが訓練や戦闘に参加した時、食事に要する経費はどこから出たのですか（崔全福）その時は各村がその村人の食事を提供した。（楊成敏）そうではない。戦闘の時、最初は楊貫一が食事を提供し、戦闘が終わると、かかった費用を各家に平均して割り当て、みなで共同で負担したのだ。

問：天門会には、普通会员と常備隊員すなわち戦闘人員とがいたといいますが、あなたがたはどちらに属していたのですか（崔振國）わたしは当時総弁事処について、交際員（外交）、副官処の中尉副官と第二小分隊の会計をしていました。

問：天門会の常備隊員には決められた制服があったのですか、生活費は支給されたのですか（尚金山）戦闘の時には天門会には制服があって、藍色のものでみな楊貫一が支給した。基本的には一年に二着の服があって、単衣が一着、綿衣が一着です。上着には四つのポケットがついていた。（崔全福）当時の生活費には口糧と手当（津貼）が含まれ

ていたが、食糧すなわち小麦か粟で支給され、金は支払われなかった。その基準は地位によって異なっていて、大月に兵士は一〇〇斤、副班長は一一〇斤、正班長は一二〇斤、排長以上ははっきり覚えていない。この点は基本的に軍隊と同じだ。(崔振国) 経費は各村で負担した。豊年は多く不作の年は少なかった。わたしは毎月一三〇斤の食糧だった。

問：天門会の勢力は非常に大きかったそうですが、天門会の組織が村の政権の役割を果たしていたのですか。(楊成敏) 当時保甲制度が実行されていて、村には保長・甲長がいた。これらの人の中には天門会に参加した者もいたし、参加しない者もいた。天門会に参加した者でも(保長としては)天門会の事に関わらなかった。村の政府は村の事を扱い、両者は互いに代替できなかった。

問：二、三十年代、ここいら一帯には聯荘会はなかったのですか。(楊成敏) ここでは主に天門会があった。だから実際には聯荘会が天門会だった。

問：文帝上神は靈験があったのですか、それは何を守ってくれたのですか。(尚金山) 当時は、当然靈験あらたかだと思っていた。喬村に土匪と戦いに行ったのは三二人に過ぎなかったのに、土匪には大変な数に見えた。天門会は戦って負けたことはなく、戦えば必ず勝てた。これは文帝上神の御加護があったからだ。ふだんも文帝上神はわれわれの安全を守ってくださった。

問：一般的に言って中国の秘密結社で崇拜される神には、歴史上の人物とか、伝説や小説の中の人物とかがあります。文帝上神とは誰のことですか、その神像をみたことはありますか。(尚金山) われわれは文帝上神が神であることを知っているだけで、具体的に誰のことかはみな知らない。一番最初楊貫一から聞いた。文帝上神には牌位があるだけで、神像はない。

問：天門会に参加した者には貧乏人が多かったのですか、年齢の制限はあったのですか（楊丙文） 天門会に参加した者には貧乏人が多かったが、金持ちや文化人も参加した。なぜなら土匪はどんな人からも奪うが、金持ちの損害はより大きかったからだ。年齢には特別の規定はなかった。当時最年少の者が十六、七歳で最年長は六十余歳だった。若者は基本的にみな参加した。

問：天門会には女性も参加したのですか（楊丙文） 女性の参加は許されなかった。女は見物することさえできなかった。なぜなら女は不吉とされたからで、戦闘の前日には女と話をすることもできなかったし、家に帰ることもできなかった。

問：天門会に参加した者は会費の類いの物を出して日常活動を維持したのですか（崔全福） 天門会に参加した時には何も出す必要はなかった。最初武器はみなそれぞれ備えていて、家に大刀がある者は大刀をもち、長槍のある者は長槍をもった。生産から離れた部隊（脱産隊伍）の経費は割り当てた。ふつう所有地の面積の多寡に応じて割り当てた。日本軍がここにいた時にも、天門会が地方で錢糧を徴収して治安を維持するのを許可していた。

問：ここらには大仙会というのはありませんでしたか、資料によれば大仙会は金持ちが参加した組織だといいますが、その状況を知っていませんか（楊成敏） 三角村には大仙会はなかった。しかし、周囲の村にはあった。大仙会もやはり自発的な大衆組織で、決して金持ちだけが参加したものではなかった。

問：天門会は負けたことがなかったそうですが、なぜ天門会はそんなに強かったのですか（王発連） 天門会がそんなに強かったわけではない。このあたりの土匪は大変数が多くて、土匪が来襲すると貧富にかかわりなく奪いつくされたから、みなが立ち上がって死を恐れず、心を一つにし力を合わせて命懸けで土匪と闘った。われわれの人数も土匪に比べて一層多かった。みな迫られてそうしたことだ。

問：三角村での豊かな家は何軒くらいありましたか、またふつうどれくらい土地をもっていたのですかⅡ（王発連）解放前、この村の地主と富農はぜんぶで十軒くらいあった。楊貫一の家が最大の地主だった。これらの人の所有地は、最少で六十余畝、もっとも多い者でも二百余畝を超えなかった。

問：三角村で楊家は最大の家族だったそうですが、ここには楊家の祠堂はないのですか、天門会の時期に楊家の全員が節句や春節だとか冠婚葬祭の時に集まって宴会を開くようなことはなかったのですかⅡ（楊丙文）ここでの活動は全村的なもので、楊家だとか、崔家だとか、尚家だとかが単独で活動をするようなことはなかった。ここでの風俗習慣について言えば、逢年過節は各家族はそれぞれ過ごした。春節は後輩が長輩に対して年始回りをしなければならず、これは全村的なことだった。ただ輩分を分けるだけで、姓氏を分かつたず、異姓の者にも年始に行った。

問：天門会は、平時には家で労働し、有事には闘いでかけるといような軍政一体化した組織ではなかったのですかⅡ（楊成敏）わたしは楊貫一の叔伯弟々だ、すなわちわたしの父とかれの父とが兄弟だった。当時、楊貫一は畑で働くことはなかったが、わたしも含めてかれの兄弟の中には、長工もいたし、短工をして生活している者もいたが、戦闘の時は戦いでかけた。しかし、実戦の機会はとても少なかった。

問：この村の人は現在どんな神を信じているのですか、まだ文帝上神を信奉しているのですか、村にはどんな廟がありますかⅡ（王発連）：現在人々が信奉しているのはやはり文帝上神だ。村には文帝廟があって、ふだん初三・初六・初九の日には老婆はみな焼香にお参りする。陰曆臘月三十日と正月初日一・十五の日には、本村人はほとんどの家族が焼香にでかける。しかし、外村人はこない。村には土地廟もあり、ここにも人々はみな焼香に行く。文帝廟と土地廟の他に壽寧寺がある。元の建物は壊されたが、迷信深い老婆が二間の廟を再建して、その中には仏爺が奉つてある。

問：昨日われわれは東山と南山を参観しましたが、そこでは香火がとても盛んでした、三角村の人もお参りにいくのですかⅡ（楊丙文）行く人は大変多い、主として南山の碧霞宮だ。お参りする者の大半は女性で、一家の平安をお祈りする。

問：天門会の武器は最初紅纓槍が主として使用されていたといいますが、小銃はなかったのですかⅡ（崔振国）大槍（小銃）・短槍（ピストル）・手榴弾みなあった。どれも身家の安全を守るためのものだ。

問：外村人も三角村の天門会に参加したのですかⅡ（崔全福）付近の村にはどこも天門会の組織があったから、外村人がこの村の天門会に参加する必要はなかった。当時、天門会を学びにこの村にくる人もいたが、その後帰ってその村の天門会組織を發展させた。

問：文帝上神に進香する儀式はどのようにおこなうのか、実演してくれないだろうかⅡ（尚金山）それはとても簡単だ。第一歩は線香に点火し、香炉に立てた後、三回叩頭すれば完了だ。

3 楊貫一とその家族

時：一九九三年一〇月三〇日

場所：河南省新郷市河南師範大学会議室

応答者：楊玉田（五四歳、楊貫一三男）、楊錫田（四六歳、五男）、楊釗田（四一歳、六男）、楊藥田（四〇歳、三女）、趙繼泉（四二歳、楊藥田の夫）

問：わたしは日本で中国の秘密結社のことを研究しており、天門会とその指導者についても大変興味をもっています。

本日は楊貫一さんのことをお聞きしたいのでそのご家族に来ていただきました。まず皆さんの名前と年齢を教えてください。〓（趙継泉）楊貫一には十人の子供があり、現在健在なのは九人います。その中で新郷で勤務している者は七人で今日ここに来たのは四人です。三人は仕事が忙しかったり、出張中だったりで出席できませんでした。長男の楊硯田は貴州省安順県人民武装部部长をしていましたがすでに退休しました。次男は解放戦争中に大別山で犠牲になりました。三男の楊玉田は今年五四歳で、今は新郷市環境保護局に勤務していて、党支部の副書記をしています。四男の楊静田は新郷市対外貿易公司車隊生産調度科科长をしています。五男の楊錫田は今年四六歳で、新郷市対外貿易公司で部門經理をしています。六男の楊釗田は今年四一歳で、新郷市東宝中薬有限公司で生産配套部で副經理をしています。楊貫一の娘は四人いて、長女はハルビンで仕事をしています。次女の楊芹田は新郷市教育局電教館に勤務しています。三女の楊藥田は四〇歳で新郷衛生檢驗所の労働者です。わたしは彼女の夫で今年四二歳でやはり衛生檢驗所で仕事をしています。もっとも若いのは四女ですが今日は出席できませんでした。

問：楊貫一さんの日常生活の様子、とくにあなたがたをいかに教育したかを紹介してください。〓（楊釗田）わたしの父親はとても穏やかな老人でしたが、わたしたちの教育については非常に厳格でした。この点は強く印象に残っています。一九五八年から父は新郷市展覽館の家族宿舍に住むことになりました。わたしは一九五二年の生まれだから当時六歳でした。ふだん父はわたしたちに対していつも穏やかでしたが、わたしたちが過ちを犯したり勉強をさぼったりすると厳しく叱りました。かれはわたしたちが学校でよく勉強し少しでも怠ける気持ちをもたないよう要求しました。一九六三年ころになると、父は新郷專署水利局（現在の新郷地区水利局）に転任しました。錫田兄は兵隊になっており、玉田兄は北京の大学に行っていました。残る兄弟数人が家で父と一緒に生活していました。当時父はいつもわたしたちに解放前に自分がおこなった地下工作のことを話しました。わたしたちは当時幼くて、食事や服装が他の

家の子供より粗末だと思っていました。父はわたしたちに自分が遊撃戦をやっていた時どんなに苦しかったかどうに困難を克服して工作をおこなったかを話しました。わたしたちに困難にくじけない純朴な生活作風を培おうとしたのです。仕事の上では、父は自分に対する要求の厳しい人でした。たとえば当時身体の具合がとても悪いのに、しっかりと黄河の洪水防止の仕事を続けました。水利局がビルを建てた時には、父はいつも病をおして現場に行って労働者と生活を共にして、ビル建築の施工にあたりました。一九六六年に文化大革命が始まって、父は天門会の場合を報告するよう求められて衝撃を受けたようでした。

問：楊貫一さんがどんな本を読んでいたか、覚えていますか（楊玉田）父は新聞を読むのがとても好きでした。読書としては、中国通史・中国近代史や毛沢東選集を主として読んでいました。父の日常生活の様子はいつも簡素なものでした。これは衣・食・住・行動といういくつかの面から説明できます。一般的に家での食事はありあわせのものでした。祖母が健在のころ、主食は基本的に玉米糊々（トウモロコシの粉を主とする糊状の食べ物）・甘藷・大根などで、生活はかなり苦しいものでした。わたしは古い家で生まれて育ったので、弟たちよりいくらか多く実情を知っています。父の服装は大変簡素で、いつもはいていたのは中国式のズボンでした。室内の装飾もとても簡単で、かれは生活は低い基準にそろえるようわたしたちに求めました。さらに金の使い方についてもしっかりとしていました。たとえばわたしが大学に入学した時、毎月の生活費は一二・五元でしたが、父はわたしに一五元くれましたので、わたしの小遣いはわずかに二・五元でした。かれは無駄遣いを許さず、わたしたちに苦しい生活に耐える簡素な習慣を養わせようと思いました。父はわたしたちについても、国家の利益と党の利益を重んじて教育しました。わたしは五〇年代初めから一九八三年までずっと外地で工作をしていて、一九八四年になって転任で新郷に帰ってきました。それ以前にわたしが探親休暇で家に帰ると父はいつも「玉田、今回の休暇は何日間だ」と訊きました。わたしが十二日間

(これは以前の探親休暇の規定日数です)と答えるとかれは「好」と言って、休暇の十日目になるとわたしに「お前の休暇はあと二日間だけだ、汽車の切符を買いに行きなさい。予定どおりに隊に帰ってそこでしっかりと仕事をしなければならぬ」と言ったものです。そのことはよく覚えています。かれはいつもわたしたちが立派に仕事をして早く共産党に入党できるよう教育しました。

問：楊貫一さんは何を信仰していましたか、三、四十年代共産党と接触する以前にかれは文帝上神を崇拝していましたか、後半生においても依然として文帝上神を信奉していましたか、それとも思想・信仰に変化がありましたか、あったとすればそれはいつ頃でしたか。(楊釗田)その問題については父は口を閉じて語りませんでした。後になってようやくかれは自分が文帝上神を信仰していたことを話しました。しかし、わたしが入学して初等中学に入るまでの期間、すなわち一九六〇年代のことですが、父はいつもわたしたちに「わたしは共産党員ではないが、わたしの子供達が中国共産党に入党して、党の指示に従って党とともに歩むことを希望している」と話しました。

問：晩年に楊貫一さんは天門会の歴史をどのように評価していましたか。(楊釗田)かれはいつも天門会の歴史を回想していました。とくに自分の部下だった人が会いに来た時にはいつも一緒に当時のことを話し合っていました。かれ自身は天門会の歴史についての原稿を書いていました。浚県でも『天門会の変遷』という本を編集したそうです。また楊延田が書いた『衛河水滔々』も天門会についての本です。

問：楊貫一さんは最後まで共産党に入党しなかったのですか。(楊玉田)父は共産党に参加しませんでした。かれは無党派の民主人士として政府の工作に参加しました。父は新郷市政协商會議の第二、三期の委員です。問：かれはなぜ共産党に入党しなかったのですか、過去に天門会に参加したので入党できなかったのですか、それとも入党を望まなかったのですか、あるいは共産党はかれが党外にあって活動した方がよりよい効果を収めるという判

断でそうしたのですかⅡ（楊錫田）かれは共産党の組織に参加することを望まなかったのです。政治的傾向の上では共産党と一致していましたが、かれは共産党という党派組織の中には加入しなかったのです。

問：お父さんの写真はもっていますかⅡ（楊釗田）五十余歳のころの写真があるだけです。以前の写真はみな保存できませんでした。

問：あなたがたの中でだれが一番お父さんに似ていますかⅡ（楊釗田）長兄がもっとも似ています。三兄もとても似ています。

問：解放後に共産党が発動した政治運動、たとえば三反五反運動・反右派闘争・四清運動、そして文化大革命などの中で、楊貫一さんは天門会との関係から批判や迫害を受けましたかⅡ（楊玉田）前の数回の運動では何のショック（衝撃）も受けませんでした。文化大革命では迫害を受けました。当時それが波及した範囲はとても大きく、二叔・三叔・長兄さえもみなとばっちりを受けてました。錫田も部隊でとばっちりを受けて、探親帰郷の時に父に会うことができませんでした。（楊藥田）一九六六年から一九六七年のおよそ一年間、父は隔離審査を受けて家へ帰れませんでした。子供のわたしたちも監視され、父も過去の事を書かされて検査されただけでなく、菜園で水運びや水まきなどの労働をさせられました。さらに批判がなされ、給料も差し引かれ、本人に毎月一二元の生活費が、家族と子女に九元の生活費が支給されただけでした。家族と子女も職場（工作单位）を追われて家に返されました。後に名誉回復（平反）されましたが、一九六八年から一九七三年にかけてまた一度批判を受けました。

問：お母さんの名前は何かといいますか、まだご健在ですかⅡ（楊錫田）母の名は郭秀蘭といいます。一九七五年に亡くなりました。彼女は父の最初の妻ではありません。

問：楊貫一さんの過去の経歴のことであなたがたにも進学や勤務などの面で悪影響がありましたかⅡ（楊錫田）影響

はかなり大きなものでした。わたしについていえば、文革の時期にわたしは外地で工作していましたが、新郷市水利局（父の工作单位）が父の経歴の問題（歴史問題）を書いた資料に公印を押し、わたしの職場に送付してきました。それはわたし個人の檔案に挿入されたため、その後この資料はずっとわたしの檔案についてまわりました。一昨年（一九九一年）にわたしが深圳に出張するために辺防証を作った時によくやく廃棄されました。こうした資料は個人の昇進に大変影響したものです。（楊玉田）今はわたしたちが何をし何を話しても実事求是で判断されます。進学の面では、入学試験では何の影響もありませんでしたが、卒業分配の時には規制を受けました。父の歴史問題のためにわたしは重要な保密単位や機要部門に勤務することを許されませんでした。（楊錫田）わが国では政治審査はとても重要なもので、就職や昇格あるいは入党・分配・給料などのどの面でも、父の歴史問題が檔案に記載されていることだけで、政治審査にパスできませんでした。

問：土地改革の時の楊家の階級成分は地主ですか（楊錫田）地主ではなく中農です。四清運動の時に上層中農と規定されました。父は地主家庭の出身ですが、国民党の第二回目の清剿の時に家産は没収されました。ですから父が起義を宣言した後は土地はなく、土地改革の時期にも何の家産もなかったのです。四清の時には家庭の階級成分は土地改革前三年の家産状況を基準にして規定されましたので、その当時三畝のやせた土地しかなかったのです。

問：河南人民出版社の『燎原』という雑誌第六期に以前掲載された姚蘭の「智取天門会」について、あなたがたは不満で何度も抗議したと聞いたが、その文が歴史事実と違っている点はどこにあると思っっていますか（楊玉田）あの文章が発表された時わたしたちは非常に憤慨しました。わたしたち兄弟は、長兄を代表にして四回にわたって鄭州に行って、河南人民出版社に質問するとともに抗議し、かれらと姚蘭本人が陳謝するよう要求しました。（趙継泉）姚蘭は『新郷晚報』社副刊の編集者で、一九六二年に浚県で勤務していた時に、当時の共産党県委員会副書記の付凌雲

と親しく付き合っただけから天門会の話聞いたのです。四清運動の時、かれは農村に行っていくらかのインタビュー資料を収集して、それらに基づいて「智取天門会」という一文を書いたのです。かれは一切の秘密結社は反動的会道門であるという理論によって史実を解釈しました。これは文化大革命以前の観点で、すでに過去のものです。一九八四年にかれがその文を発表した時、わたしたちと姚蘭の最大の分岐点は天門会と天門会時期の父の評価の問題です。姚蘭本人の言うところによれば、発表された文章とかれの原稿とはかなり相違しているのだそうです。多くの内容が編集部によって付け加えられたということです。